

住吉の歴史と文化と帝塚山

小 出 英 詞

はじめに

住吉大社の小出でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

帝塚山派文学学会の設立記念の講演にあたって、私のような神職が登壇することは、一見して場違いなように感じられます。ところが、帝塚山の土地と背景を語る上では、その基盤にある「住吉」という存在を無視することはできません。そのため、本学会にお誘いされて講演いたします次第です。ここでは、住吉という土地と住吉大社についてお話いたします。

ご存知の方も大勢いらっしゃるかと思いますが、今日「帝塚山」と呼ばれる地区は、元もと大阪府東成郡住吉村の一部でした。さらに遡れば摂津国住吉郡住吉村でした。いづれにしても帝塚山は住吉村の中に位置していた



図1 帝塚山行楽図（『住吉詣狂歌集』）

のです。

帝塚山といえば、地名の元になった古墳「帝塚山」があります。江戸時代、大坂の町の人々が住吉詣に繰り出す時、紀州街道を南へ歩いて参拝したものでしたが、この街道からよく眺められたのが古墳「帝塚山」で、それにつづく丘陵にあった「岸の姫松」とともに住吉詣の風景としてよく知られた存在でした。それは『摂津名所図会』や『住吉名勝図会』といった当時のガイドブック的な地誌にも多く画かれています。

また、江戸時代の天保五年（一八三四）刊行『住吉詣狂歌集』の挿図にも帝塚山の光景が描かれています。（図1）それを見ると、帝塚山古墳に住吉詣の人々が次々と登っている様子がうかがえますが、山頂には簡易な葦簀屋根が設けられ、腰掛けて茶を飲みながら一服し、西麓にひろがる住吉新家の町並や住吉浦の帆掛舟を眺めている、なかには住吉詣の名物土産「竹駒」を手に行っている人物も見られます。今でいうピクニックのような感覚でしょうか。住吉詣の前後に立寄って、まさに物見遊

山の一場面、人気スポットであったのが帝塚山（の原風景）でした。
ここでは、帝塚山の背景にある「住吉」の歴史と文化について、簡単な概略をお話していこうと思います。

あまりにも古い住吉

近年、大阪の文化を論評するにあたって、不当な表現や誤った観念が広まって、わざと卑下する見方も数多く見られます。しかし、それらの多くは無知や誤解、あるいは悪意に満ちたものもあり、本当に残念なことです。その悪い大阪のイメージに対して、今回取り上げる「住吉」は、とりわけ古い歴史と豊かな文化面を内包している特異な存在といえます。(図2)



図2 住吉の象徴「反橋」(太鼓橋)

いうまでもありませんが、住吉という土地は、住吉大社という神社と切っても切れない関係にあります。住吉大社の創建については、伝承によれば西暦二一一年(神功皇后摂政十一年)といわれます。それに基づいて平成二三年にはご鎮座一八〇〇年を迎えました。その実際の年数とはかく、非常に古くからの土地柄であることは間違いありません。

さて、我国最古の文献といえば『古事記』ですが、上巻には神話が書かれています。その中で住吉大神がご出現の場面や、当地に住吉大社がお祀りされる経緯などが叙述されています。住吉大社のご祭神(底筒男神・中筒男神・表筒男神の三柱)が出現される箇所註して「墨江(すみえ)の三前の大神なり」とあります。最古の文献の本文中で、特定神社の鎮座地が最初に言及されているのが住吉大社であります。

また、「住吉」という言葉は、現在スミヨシと訓んでいます。古代ではスミノエと訓んでいたそうです。先ほどの『古事記』もそうですが、

古代歌謡集の『万葉集』でも住吉を詠んだ和歌がたくさん収録されていますが、奈良時代の当時はいずれもスミノエと呼び習わしていたようです。やがて、『古今和歌集』などが編纂される平安時代の半ばぐらいには、現代と同じく住吉をスミヨシというようになったとのことです。神社はもちろんのこと、里や土地などはスミヨシで、岸・浜・浦といった海に関するものはスミノエと、いつしか言葉が呼び分けられたものといわれています。

ちなみに、現在の神社名称の「住吉大社」は、通常ではスミヨシタイシャと呼称しており、ご祭神の住吉大神をスミヨシオオカミとお呼びしているのですが、実際に神社の祭典などで神様に対して祝詞を奏上する際には、スミヨシではなく、スミノエノオホカミと古語でお名前を読み上げております。

『摂津国風土記』（逸文）によると、住吉大神が当地をめぐられた時に、「真住吉（ますみえし）住吉国（すみのえのくに）」と気に入られたため、これを約めてスミノエと呼ぶようになったといえます。これは、安住の地としての「住み良い」意味と、眼前に澄みきった入り江がひろがる景勝地「澄みの江」であったことを示しているようです。

源氏物語の名場面

古代から参詣の人々によって愛でられた住吉の風景は、まさに風光明媚という言葉にふさわしい景勝地であったと思われます。それは『古今和歌集』をはじめ数々の和歌にも詠まれて通っています。その風景と神社の存在は、文学においても大きな存在感を示しており、『源氏物語』の重要な場面にも登場しています。

『源氏物語』といえば、日本の王朝時代を代表する古典文学であり、世界に冠たる初の女流文学で、最古の長

編小説としても知られ、今日では広く海外で読まれているほどです。一般的に『源氏物語』の世界観といえますと都中心の話で、京都の場面ばかりと思われがちですが、とても重要な場面に住吉の神、住吉の地が登場しています。とかく大阪にお住まいの方もあまり意識されていないように思われます。

物語では、光源氏が左遷となり須磨の地に流されますが、その先では明石入道と明石の君の父娘との出会いがございます。明石入道は信心にあつく、特に住吉明神を信仰していました。彼の勧めもあって、光源氏は住吉明神に祈りをささげます。その甲斐もあり、まもなく光源氏は都への復帰が許されるのでした。ここまでが有名な「須磨」と「明石」の帖になります。

この結果、光源氏は願ほどきの御礼参りとして盛大な住吉詣を行います。この様子は王朝絵巻の名場面として数多く描かれています。これが「濡標」の帖です。海上の標識である濡標（みおつくし）と、身を尽す恋の意味を掛けたものですが、物語中で最も人気のあるクライマックスシーンというべき場面です。ちなみに、現在の大阪市の市章は濡標でございしますが、『源氏物語』の住吉詣とは深いご縁を感じるものです。

さて、光源氏が住吉明神に祈りをささげて中央政界に復帰したこと、つまり、没落左遷の身から再び立身出世することは、住吉を考える上で重要なキーワードでもあります。

立身出世の願い

例えば、おとぎばなしの原典といわれる『御伽草子』ですが、日本人ならば誰もが知っている「一寸法師」も住吉が舞台でした。



図3 一寸法師 『日本エバナシー一寸法師』昭和2年 春江堂

「一寸法師」では、難波（なにわ）の里に住む老夫婦が四十歳になるまで子がなく、子宝を住吉の神に祈る場面から物語が始まります。俗に、おとぎばなしでは、「昔むかしあるところに、お爺さんとお婆さんがいました」という言い回しが有名ですが、ここで登場する夫婦は四十歳とあります。昔は「人生五十年」と表現されましたが、寿命のもっと短い時代のはなしです。医療が高度に発達した現代社会でも、四十歳といえは高齢出産ですから、物語の時代では相当なものであります。その四十歳の老夫婦が住吉大社に参拝して、子宝の祈願をしたところ、住吉の神より授かったのが一寸法師でした。いうならば、住吉様の申し子であります。（図3）

いつまでも大きくならない一寸法師は、ある日、都へと旅立ちます。お椀の船、箸の櫂、針の刀、麦藁の鞆などを準備して、住吉浦から漕ぎ出てゆきます。浜伝いに北上し、淀川を遡って都に向かいます。や

がて、宰相の屋敷に厄介になり、策略をもって姫君をもらい受け、故郷に帰ろうと船出したところ、鬼の住む島に流れ着きます。ここで皆様ご存知の通り、鬼を退治して打ち出の小槌を手に入れるのです。小槌を打ったところ、一寸法師の背丈が大きくなり、次にお腹がすいたので再度打てば御馳走が出現して満足し、最後に打ったところ大判小判、金銀がたくさん出てきたとあります。

やがて、姫君とともに都に戻ったところ、この話が評判になり、ついには時の帝からも参内のお声がかかりました。すると、聞けば、一寸法師の父であるお爺さんは、無実の罪で没落した堀河中納言の子で、お婆さんは伏



図4 石濱恒夫『大阪詩情 住吉日記・ミナミーわが街』昭和58年 朋興社

見少将の娘であったが判明しました。こうして、一寸法師は少将に、やがて中納言に取り立てられ、都に父母を呼び寄せて、自身は子宝にも恵まれてハッピーエンドとなります。『御伽草子』物語の末尾には、「住吉大社で誓願を立てれば末繁盛に栄えるのだ」とあり、住吉の神が非常におめでたい神として特に語られています。その背景には、「小さく産んで大きく育てる」「かわいい子には旅をさせよ」などの要素があり、なにより「立身出世」の願いがこめられた物語といえましょう。

話は少し逸れますが、大阪と関わりの深い人物でいいますと、太閤さんと親しまれる豊臣秀吉も立身出世の象徴ともいえます。今も昔も、大阪に限らず立身出世の願いは皆同じであります。

ところで、川端康成も住吉三部作として「反橋」「しぐれ」「住吉」の短編作品がありますが、この発表後しばらくして次々に名作を世に出してゆきます。やがて、世界に評価されノーベル文学賞を受賞するまでに駆け上がりついでに、立身出世という言い方もできると思います。少し恣意的かもしれませんが、住吉を一つの転機とする見方もできるかもしれません。

住吉三部作のうち、特に印象的なのは「反橋」にて、「反橋は上るよりもおりる方がこはいものです。私は母に抱かれておりました」というところです。なお、石濱恒夫『大阪詩情』「住吉日記」によれば、川端康成が幼少期に、親に連れてこられた記憶があることを直接本人から伺ったとあります。(図4)

ただいま、文学と立身出世というテーマを例に話しましたが、それだけでも充分にお話ができるくらいに「住吉」

は引き出しも多く、大変な裾野の広さを持っている土地柄であります。もちろん文学だけではありません。少し歴史についても触れます。

海と港と船の守護神

住吉という地は、もとは海に面しておりました。古代の大和朝廷と呼ばれた時代から、朝廷の表玄関として重要な港であり、そこを出入りする船舶や海上交通の守護神として住吉の神が尊ばれてきました。

昨今では、インターネットやパソコンなどで簡単に航空写真や衛星写真が見られる時代ですが、ぜひとも大阪湾と住吉に注目して見てください。住吉大社は北緯三四度三六分の位置にあります。その西方に真直ぐ行き着くところは、ちょうど明石海峡のど真ん中であります。近世に栄えた大阪の船場でもなく、中世に黄金の日々と謳われた堺の港でもなく、住吉大社が大阪湾の中心に位置しており、湾の出入口である明石海峡と同一線上にあるということ、それこそが古代の住吉の特異性を物語っています。

記紀などによれば、仁徳天皇の御代に住吉津（すみのえのつ）を定めたとありますが、これが日本で最初に朝廷の正式な港と定められたということです。これが大阪港や堺港の起源でもあり、水都大阪の起点となるものです。それ以後、遣隋使・遣唐使などの海外使節団を派遣する際には、住吉大社で祈願をして船出しています。日本を代表する海の神と認識されてまいりました。現在でも、家内安全・商売繁盛の祈願はもとより、海運、造船、漁業関係に至るまで、海の関係者による参拝が数多く行われています。さらに、遣隋使・遣唐使の故事によつて、外交や貿易の神としても崇敬を集めていきます。

今日の大阪のイメージではステレオタイプで「コナモン」が必ず出てきます。つまり、粒食に対して粉物を食する文化です。現在、コナモンといいますが、たこ焼き・お好み焼きなどのB級グルメとされるものや、うどん・ラーメン、さらには和菓子などまで含まれます。この料理法としての粉食を日本に取り入れたのが、住吉ゆかりの遣隋使・遣唐使たちによってでありました。

住吉津がどこにあったのか議論のあるところですが、住吉の港より出発した海外使節団は様々な文化・技術を摂取して、また住吉の港に帰ってきました。大阪のコナモン文化の伝来地として見ることも出来る訳です。偶然ですが、帝塚山地区の西側で、住吉区と住之江区にまたがって「粉浜」という地名があります。正確な地名の起源はともかく、かつてコナモンが上陸した浜辺として住吉の「粉浜」に想いを馳せるのも面白いかもしれません。ちなみに、遣唐使といえば、菅原道真の建白によって八九四年に停止されました。これによって、海外の玄関口であった住吉が大きな転機を迎えます。遣唐使の廃止によって、大陸の文化交流が一段落し、日本国内では国風文化が育まれたといわれています。ところが、住吉の地と住吉大社はそのまま忘れ去られることはありませんでした。依然として海の神様ではありましたが、以後は特に和歌・文学の神として信仰され、平安・鎌倉以後の文化人にとって益々憧れの対象となりました。

こうして海神は歌神として進化を遂げ、『古今和歌集』にはじまる勅撰集に数多く詠まれる歌枕の地となり、また、『源氏物語』『伊勢物語』『住吉物語』といった作品において「住吉」は重要な役割を果たし、中世以降も『御伽草子』『一寸法師』など、様々な物語にも「住吉」は登場してきました。なかでも、中世を代表するものとして忘れてならないのは能楽です。

能と住吉と大阪

能楽といえますと、日本を代表する伝統芸能であり、ユネスコ無形文化遺産にも登録されています。古くは猿楽と呼ばれ、武家の式楽として尊ばれた芸能でありました。

現在の流派の起源が、奈良の大和猿楽にあったことはよく知られていますが、かつて大阪にも猿楽座が存在していたことは、あまりにも知られていません。

現在の大阪市城東区あたりには榎並荘がありました。今も城東区野江には榎並小学校の名が残っています。ここには丹波猿楽の流れである猿楽の榎並座があり、住吉大社の庇護のもと、室町中期に隆盛したといえます。

住吉大社の祭礼に猿楽が参加していたことは、すでに鎌倉時代の神事記録『住吉太神宮諸神事次第記』という史料にも見えています。室町時代になると、榎並荘の猿楽集団が住吉大社の特権を有して榎並座を形成したのもと思われ、ここを拠点に住吉大社の御田植神事などの祭礼に奉仕するほか、一時は猿楽全体の主流派ともいえるべき勢力を持ったようです。その後、今の観世・金春・宝生・金剛流の元になる大和猿楽へと移り変わりましたが、かつて大阪にあった猿楽座は住吉大社と共に隆盛を見たこととなります。

また、能楽の作品には住吉を扱ったものが数多く、住吉の神が出現、もしくは住吉が舞台のものは、『高砂』『雨月』『白楽天』『住吉詣』『富士太鼓』『梅枝』『岩船』など作品名を挙げると切りがないほどです。

その作品の中の『高砂』は特別です。能の代表格ともいえるべき作品ですが、祝言の曲として日本人に親しまれたものです。誰しも一度ぐらいは「高砂」の名前を聞いたことがあると思います。昨今では結婚式で新郎新婦の席をこのように呼ぶこともありますが、やはり能の『高砂』に由来する呼び名です。つい半世紀ほど前までは、結婚式の定番として謡われたものです。有名な待謡のくだりでは、「高砂や、この浦舟に帆をあげて」と始め、「は



図5 『高砂』住吉明神の出現

や住の江に着きにけり、はや住の江に着きにけり」と結ぶものですが、ここで住吉・住之江が登場しているのです。

かつて、日本の津々浦々で婚礼を挙げる人々が、それを言祝ぎつつ、「住吉」を謡い上げていたこと、これは非常に大事なことと思われれます。この大阪の「住吉」がどれほどのブランド力を持っていたのか。大変にめでたい土地柄、美しい景観で、靈験ある住吉の神のいらっしやる特別な地、これら「住吉」の特異性を物語る重要な例と思われれます。

しかしながら、現在の「大阪」のイメージでは、そういう面があまりにも語られていません。なお、同じく『高砂』ゆかりの兵庫県高砂市では「プライダル都市宣言」を行っているほどですが、むしろ大阪こそプライダル都市であると言うべきでしょう。

作品中では、尉と姥から相生の松について話を聞いた主人公は、高砂を船出して住吉に到着し、そこで住吉明神が出現(図5)、夫婦の仲と長寿の祈り、そして世の中すべてを祝福する場面で結ばれます。この住吉明神を通じて「相生の松」の徳が語られることにも注目されます。相生(あいおい)とは、共に生まれる、共に生きる、共に老いる、このような夫婦の在るべき姿を表現した素晴らしい言葉であると感じています。近現代の大阪文学を代表するものに、織田作之助の『夫婦善哉』が挙げられますが、私は住吉ゆかりの『高砂』の夫婦相生を思いつつ、どこか文学の根底に流れるものを感じています。

住吉の松のこと

相生の松についてお話しましたが、住吉の神木は松樹とされ、数々の和歌にも詠まれてまいりました。なによりも、日本人にとって「松」はとても大きな存在でありました。

今でも、おめでたいものを並び立てて「松竹梅」という言葉があり、その筆頭に松を挙げています。日本の文化において、重要な場面や場所です。松がたびたび登場します。

余談ながら、大阪はおめでたい都市で「松竹梅すべての神様が揃っています」と調子よく表現します。住吉の松で住吉大社。商売繁盛の笹竹で今宮戎神社。天神の梅で大阪天満宮。いずれも大阪市内で人気のある神社です。いずれにしても、神様で縁起担ぐ時、おめでたさの筆頭は、昔も今も松を神木とする住吉大社であります。

天皇陛下から勲章をいただく叙勲の授与式は、皇居「松の間」で行われます。江戸城では大広間から將軍謁見の対面所へ至るところは「松の大廊下」でした。あの赤穂浪士討入事件のきっかけの、浅野内匠頭が斬り付けた廊下です。能舞台の正面には神聖な「老松」の鏡板が描かれ、遊女の最高位は「松の位」と称されました。正月には門松で新年をお迎えしますが、春夏秋冬を通じて青々とした常緑樹の松樹、まさに不老長寿の象徴として珍重されてきました。

近世以降になって、景勝地の代表格として「日本三景」というものが喧伝されるようになりました。いわゆる安芸の宮島・天の橋立・松島のことでありますが、いずれもが松と海のコントラストであることに気づかれました。この松のある浜辺の景色、それこそが白砂青松と賞された古の住吉のイメージであり、「住吉模様」と表現したほどでした。なお、昔の蒔絵など、美術の世界観では、海辺に松と鳥居が描かれるだけで「住吉模様」と認識されていたほどです。

このように、住吉の信仰と景観は伝説化され、後世にまで大きな影響を与えてきました。

歌と言葉の神

歌の神様、住吉大社。そう言いますと、現代ではピンとこない人も多いと思います。しかし、歌の道、和歌というものは、現代人が想像する以上に重要なものと考えられました。思案や祈りの時、恋愛の場面、旅路の思い出、古典や地理を学ぶ教材としてなど、現代風でいえば総合学問ともいうべき大事な教養でありました。歌道は別名を「敷島の道」と呼ばれましたが、「敷島」という語は「大和（日本）」にかかる枕詞ですから、いうならば和歌こそが日本人の道だということなのです。よって、歴代の天皇は歌を格別に大事にされました。『古今和歌集』にはじまる勅撰集や、歴代の御製はいうまでもなく、それを取り巻く公家、あるいは武家たち、そして庶民に至るまでひろく歌を愛してきたのです。

ところで、近世の住吉大社は、和歌の秘伝として最重要視された「古今伝受」ゆかりの神社です。そもそも古今伝受とは、古今集の語句解釈などを中心にした秘伝でしたが、その秘伝が江戸時代には天皇によって相伝されてゆき、相伝後には住吉・玉津島の両神に法楽和歌を奉納される伝統がありました。これは和歌の守護神として最高格であることを意味しています。現在も住吉大社には歴代の和歌短冊が伝来しています。（図6）

秘伝ばかりではなく、庶民たちの間でも住吉は歌の神として親しまれてきました。井原西鶴の場合は、貞享元年（一六八四）住吉大社の社頭にて大矢教俳諧に臨みました。三十三間堂の矢通しに掛けて、一昼夜で俳諧をどれほど詠めるかを競ったものです。現代風にいえば、ギネス記録とでもいえましょうか、西鶴は一昼夜で俳諧二



図6 仁孝天皇『古今伝受後御法楽五十首和歌』天保13年

三五〇〇句を詠んだそうです（これにちなんで西鶴は自身を二万翁と称しました）。もちろん松尾芭蕉も当地で俳句を詠んでいますが、一つ一つ紹介すればきりがありません。

ここで強調したいのは、和歌の神様というのは、言葉の神様であるということとです。言葉を文字に書けば文学に、調べに乗せれば歌謡になります。言葉そのものを掌る神が鎮座する地、それが住吉であります。関西圏、特に大阪の文化の特長として、よく「話芸」が注目されます。言葉を巧みに操り、話し言葉を非常に大切に作る、そのような背景のもとに、大阪が話芸と文学の町になる要素があった。住吉の神と土地と信仰をテーマに考えてみるのも面白いと思います。

住吉の繁栄と衰退

住吉大社の目の前をチンチン電車（阪堺電軌）が通り抜けてゆきます。近代化された大阪にとって、心地よいレトロ観をかもしだす風情は人々に愛され親しまれています。この帝塚山の真ん中を上町線が通っていますが、その一方、西側の東粉浜には南北に阪堺線が通っております。この阪堺線は紀州街道に沿っていますが、その街道の両側はかつて「住吉新家」と呼ばれる江戸時代の商店街でした。住吉詣の人々を相手に商売する土産物屋が立ち並び、三文字屋や伊丹屋という大料亭があった門前町が形成されていきました。

住吉の三文字屋といえば、歴史事件と関わりをもつ逸話がたくさんあります。



図7 住吉新家の三文字屋（『摂津名所図会』住吉郡）

赤穂浪士の討ち入りに先立ち、大量の武器発注を受けた堺の鍛冶職人たちが、大金を手にしてここで豪遊したそうです。結果、それを怪しまれて、ついには天野屋利兵衛が捕縛されます。ここで有名な拷問中の「天野屋利兵衛は男でござる」の名台詞のシーンなのですが、その契機は住吉新家の三文字屋でした。ほかにも、近松門左衛門が『心中天網島』を起草する際、元となった心中事件の知らせを受けた時は、三文字屋に滞在中のことでしたし、土佐藩の住吉陣屋と住吉大社に立寄った坂本龍馬が宿泊したのもここでした。（図7）

さらに、江戸時代のベストセラーといえは十返舎一九の『東海道中膝栗毛』ですが、その物語において最後の舞台は住吉であります。作品中には住吉近辺の繁盛ぶりが記述され、当時の賑やかな様子がうかがえます。繁栄を謳歌した住吉新家でしたが、やがて明治の世となり、その界隈も近代化の波にのまれてゆきます。

かつて、住吉に参詣する人々は、あるいは大坂と堺の間を往来する人々は、すべて徒歩で移動していました。よって、街道沿い各地では茶屋などで休息を取るものでした。ところが、明治時代のはじめに人力車が発明され、その往来にも変化が起きはじめます。さらに、南海電鉄の前身、阪堺鉄道が明治十八年に開業します。開業当時は、先ず難波から大和川までが運行しましたが、大阪市街地から住吉への移動手段が大きく変化したのです。

後に阪堺電軌の前身となる大阪馬車鉄道など、鉄道の開通も相次ぎました。それによって、駅前を除く、街道沿いの茶屋・料亭・土産物屋は次第に衰退してゆきます。もちろん時代や産業の変化も影響していましたが、明治の終わりには、住吉新家の賑わいも遠い昔となりました。

また、町並だけではなく、地形そのものの変化もありました。江戸時代の半ばより、大和川の付替えもあって、住吉の海岸へ大量の土砂が流入するようになりました。その結果、住吉の海辺は遠浅となり、江戸後期には潮干狩りの名所ともなりましたが、やがて急速に干拓、新田開発が進められてゆきます。

結果として、近現代まで埋立開発が進んだ結果、現代では、南港の埠頭まで七キロメートル近くも西に海が遠ざかってしまいました。

こうして、かつての名勝も夢幻となり、古い町並も衰退してゆき、住吉周辺の村落も厳しい時代を迎えることとなりました。

住吉村と帝塚山

明治維新となり、帝塚山地区を含む近辺は、大阪府住吉郡住吉村となり、やがて東成郡住吉村へと移り変わってゆきました。聞くところによると、明治初期の住吉村は、大阪府下でも下から数えた方が良いほどの寒村であったそうです。ところが、大正十四年四月、大阪市に編入される頃には豊かな村に変貌を遂げていたといえます。その背景には住吉村の宅地開発、帝塚山地区の誕生がありました。

住吉村の帝塚山丘陵を中心とする地区は、大正時代以降、東成土地株式会社によって、郊外型の住宅地として造成が開始されました。新しい町並が出来て、そこへ様々な人が集います。それは村全体との発展につながりました。(図8)

元の帝塚山地区は、冒頭に紹介したように、住吉詣にもなう野外の行楽地として親しまれた丘陵地でした。



図8 住吉・帝塚山の町と住吉大社

がっているわけです。

おわりに

そもそも「住吉」の地は、古典文学の景勝地、文人墨客の参詣地、和歌文学の聖地とされ、これらの評価は厳

いうならば、住吉村の荒地に過ぎなかった土地が、一転して宅地開発によって一つの町が誕生したのです。帝塚山古墳の麓に住宅街が形成され、その住民たちの教育施設として、まもなく大正六年に帝塚山学院が誕生しました。じつは「帝塚山」を冠する学校が、住居表示よりも以前に、住吉町の中に誕生したのでした。

帝塚山丘陵の帯にはたくさん松樹が生えていました。『古今和歌集』には、「我見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾代経ぬらむ」という住吉の松を詠んだ有名な和歌がありますが、この辺りには「姫松」と賞賛するほどの見事な松が其処彼処にたくさんあったのでしよう。江戸時代には、現在の帝塚山の北側に「岸の姫松」と呼ぶ松原の丘があり、住吉の名所にもなっていました。これにちなんで、今も駅名に残る「姫松」という地名もつきました。また、帝塚山学院の校章にも松があしらわれています。先ほど話で触れましたが、住吉と帝塚山の象徴は松でつな

然たる事実であります。近代には「帝塚山」が誕生し、当地を中心に多くの文化人が集いました。思いますには、この住吉の歴史と文化を土台として、そこに根をはり、しつとりと芽吹き、豊かに花開いたのが「帝塚山派文学」と思われます。つまり、それらは何も突然に出現したものではないということです。住吉が継承してきた長い歴史と文化の連続性があつて開花したものであること、それを再確認させていただきました次第です。

私は住吉大社の一神職として、また文学顕彰に賛同する者として、帝塚山派文学学会の設立発会にあたってお招きに預かり、この場に登壇させていただきました。そして、今回は帝塚山以前の歴史と文化の背景について、住吉大社からの視点で雑駁に紹介いたしました。

どうか、本学会の設立と活動によって、住吉・帝塚山が培った大切な文学を掘り起こすきっかけとなつてほしいと切に願います。そして、その研究成果を是非とも全国に発信していただきたく、心よりご期待申し上げます。